

## 第3講：130 「小さな埃は」

おやさと研究所講師  
尾上 貴行 Takayuki Onoue

本逸話は、明治16年頃の話である。登場人物の高井猶吉（『逸話篇』では直吉と表記）は当時23歳で、お屋敷へ住み込んでから3年経ったころのエピソードとされる。今回の講座では、この逸話にみられるおやさのお言葉と高井猶吉の信仰姿勢、また高井猶吉の信仰実践からまなぶべき日々の通り方について考えてみた。

## おやさのお言葉、高井猶吉の信仰姿勢

おやさ様は、おたすけ先から急遽戻った高井猶吉からの質問に対して、次のように答えている。

どんな新建ちの家でもな、しかも、中に入らんように隙間に目張りしてあってもな、十日も二十日も掃除せなんだら、畳の上に字が書ける程の埃が積もるのやで。鏡にシミあるやろ。大きな埃やったら目につくよってに、掃除するやろ。小さな埃は、目につかんよってに、放っておくやろ。その小さな埃が沁み込んで、鏡にシミが出来るのやで。

ほこりは、たとえどんなに気をつけていても、またほこりが小さい場合は気がつきにくいことから、知らず知らずのうちに、積もってしまい、やがて簡単にはとれないような頑固な汚れになってしまうものである。心のほこりも同様であり、心のほこりが積もってしまった結果として、自分で自分を苦しめることになってしまったり、自覚のないまま周囲の人々に迷惑をかけてしまったりという原因になりうる。このお言葉は、小さな心のほこりに気づき、たえず掃除をすることの大切さを教えている、と考えられる。

また、この逸話にみられる高井猶吉の言動から、親神の話を取り次ぐ際には、自分の考えや思いを話すのではなく、おやさの教えを、教えられた通りに、そのままお話しするという姿勢が大切である、と考えられる。このことに関して、高井猶吉は、「教祖から聞かせて頂いた話でも、わしは何回でも同じ話をする。何回話しても、一字一句間違わんように話をする。自分の考えや、勝手な言い廻しは一言も入っていない。」（高井猶久『先人の遺した教話（4）教祖より聞きし話・高井猶吉』天理教道友社、1984年、225頁）、「わしの話さしてもらうのも、わしの考えは一つもない。教祖に聞かしてもらうた事、そのままや。我々人間が、どうして考えて話できるものか。」（高井久太郎「“教えの根”生涯掘り続けて」『逸話のこころ』たずねて 現代に生きる教祖のおしえ』天理教道友社、2013年、245頁）と述べていた。これらの言葉に、おたすけに臨む際の高井猶吉の心構えや信念をみることができ、またおやさのお言葉をそのまま伝えていくことが大切である、とまなぶことができるのである。

## 高井猶吉の信仰にまなぶ日々の通り方

お道の信仰者として、心のほこりを自覚し、たえず払うことが大切なのはもちろんだが、より積極的な日々の通り方についても、高井猶吉が語っていた言葉からまなぶことができる。高井猶吉は、「日々の心のつとめ」のなかで「最も大切なこと」として、次の4つをあげている（高井猶久編、上掲書、58～63頁）。

1つ目は「陽気」。これは人間を始める時の親神の思召であ

り、個人の心定めは、陽気的心になりきること、一家ではお互いに陽気の心で陽気に暮らし合うことが大切である。また陽気ぐらしにおいては、いんねんの自覚とたんのうの心が肝心である。2つ目は、「素直、正直、一筋心」。人間創造に際し、親神がうをとみを呼び寄せた時、わきめもふらず、まっすぐに泳いできた。これが一筋心であり、これより素直、正直なものはない。そして、これを人間の雛型としたのであるから、素直、正直、一筋心が、神より定められた、また与えられた心である。3つ目は「一手一つ」。人間創造の時、それぞれの道具となったものたちは、親神の仰せ通りそのまま一つ心になり、一つの理に向かってそれぞれの立場と役割を果たして、人間が創造された。一手一つというのは、あらゆるもの始まる理となり、またふやす理ともなる。一手一つがなければ、決して個人々々もご守護を頂けず、一家も繁栄しない。一国家についても同じ理である。4つ目は「どうでもやりきる心」。陽気ぐらしにむけて、親神のお働きはやむことがないのである。

このように、高井猶吉は、日々の心につとめ方について説いていた。これらは、親神が人間を創造された時の思召、人間の本来持つべき性質、陽気ぐらし世界建設にむけての人間のあり方や心構えを端的に表しており、私たちが日々を通るうえで、大切な角目となる心の持ち方であり、行いであると考えられる。

また、おやさから直接お言葉を聞くことができない私たちは、おやさの教えを人々へ間違いなく伝えるために、教えを十分にまなぶことを、しっかりと意識する必要があるのではないだろうか。高井猶吉は、分からないことがあると、どんなことでも、納得できるまでとことん質問していたため、お屋敷の先輩たちに「お前はれんこん掘りみたいな奴じゃ」といわれ、親しまれていたという。また、「人は字知つとるさかい、書くのに一生懸命で、心に話を聞いていない。わしは字書けんよって、どんな話も性根入れて聞いた」（高井久太郎、上掲書、245頁）との言葉にうかがえるように、文字が書けないからなおさら、おやさのお言葉や先輩たちの話を真剣に聞き、一度聞いた話は忘れなかったともいわれる。私たちも、日々常々しっかりと教えの「根を掘り」、おやさの教えを深くまなぶことが不可欠であろう。

本逸話は、いかなる人であっても心のほこりは知らず知らずに積もってしまうということを十分に認識し、「小さなほこり」は、小さいからこそ、注意して見逃さないように心掛け、放っておかず払う努力をすることの大切さを改めて認識させてくれる。現代は、おやさご在世当時とは大きく社会的状況も異なるため、普遍的なおやさの教えをいかに現代の人々に理解してもらいやすいように伝えるか、あるいは社会の様々な問題をどのように教理的に理解すればよいのかを思索することが強く求められていると思われる。高井猶吉の信仰に見られるように、教えの「根」を掘り、おやさの教えの根幹を人々に伝えること、そして人間創造の元一日にこめられた親神の思召、人間の本質、あるべき姿と行動を心におさめ、日々実践していくことが肝要ではないだろうか。